

2022 年 6 月の総評に代えて

○ 林      桂 ○

● 白 野 ●（新潟県 20 歳）

水泳の授業のあとの国語では  
クラスのひとが少しあたらしい

【評】「あたらしい」がいい。髪が濡れていたりして、どこか違う様子に見えるのだろう。「友」ではなく、「ひと」という突き放した関係性も生きている。

● からすまあ ●（神奈川県 18 歳）

きっと君を音楽室に閉じ込めて  
いたら天使に羽化してしまう

【評】閉じ込めるのが「音楽室」なのがおもしろい。「羽化」も。天使は羽化してなるものなのかと新たに教えられる。もともと「君」は天使の化身にしか見えない存在だったのだろう。

● 小 沢 旭 ●（山梨県 20 歳）

明日世界が終わる気がして  
カップラーメンにお湯を注いだ

【評】世界が終わるにしても、終わらないにしても、関係なく、カップラーメンを食べるのだが、最後の晩餐に仕立てた方が、美味しくなるに違いない。

●あお●（奈良県 23 歳）

目減りする心を天使の分け前と  
思うことにして面接に行く

【評】面接前の微妙な心持ちを、絶妙に言い止めている。少し萎えた心を立て直しつつ面接に向かう。

●奎いう子●（佐賀県 38 歳）

教室のカーテン縛る夏休み

【評】夏休みに入る教室のカーテンは、外してしまうか（洗うのだ）、このように縛っておく。無人の教室の様子が外から見える方が防犯上はいいらしい。小さなできごとだが、夏休みが来た感がある。

● 奎いう子 ●（佐賀県 38 歳）

梅雨明けをぬぬと回転するケバブ

【評】「ぬぬ」がおもしろい。梅雨明けに客足が伸びる気配が感じられるのか。

● 田崎森太 ●（東京都 71 歳）

who? who? と  
梟は問う早梅雨

【評】フクロウの鳴き声の聞きなしは一般的に「ホーホー」。作者はそれを「who? who?」と聞いている。意味を持った声で聞くことで、フクロウの夜がドラマ化される。

● こはくいろ ●（大阪府 17 歳）

閉じ込めておいたんだ、  
さなぎの中へ  
光が朽ちぬように

【評】サナギの中に光を閉じ込めているという発想。光とともに成虫は現れるのであろう。

●こはくいろ●（大阪府 17 歳）

キーボード、  
青春に鍵をかけてくみたいに叩く

【評】「青春に鍵をかけてく」は、キーボードの演奏が何かとの訣別の儀式ということだろう。

●山本欠伸●（兵庫県 35 歳）

水琴窟の  
なかのような今日

【評】水琴窟は外から音を聞いて楽しむもの。なかにいてはまったく別の様相を呈してくる。閉塞感のなかの一日であったに違いない。

●im●（沖縄県 21 歳）

君、それは花瓶ですからね

【評】「君」は、花瓶を花瓶でない使い方をしようとしているのだ。ちょっと危うい感もある。

● マズルカ ● ( 山 口 県 20 歳 )

趣味特技

ほんとのことは書けないで

浮かぶ答えは「写経」の二文字

【評】「趣味特技」に本当のことを書けない提出先は、大体想像がつく。無難な「写経」の選択が一見真面目そうで、ユーモラス。

● マズルカ ● ( 山 口 県 20 歳 )

逆上がりできた一人の公園で

迷子の町内放送を聴く

【評】迷子放送の名前は自分だったに違いない。ひとりでどれだけ逆上がりを頑張っていたのだろう。

● マズルカ ● ( 山 口 県 20 歳 )

どうとでもなるよな私が歩いてて

クジラの群れが減びゆく今

【評】「どうにもならない」ではなく、「どうとでもなる」ではあるが、自己肯定の言葉で

はない。稀少価値の「クジラの群れ」の滅びゆく現在と対比する。少し投げやりな口調だが、このように書くことの中に、転機は求められている。

● 藤雪陽 ●（長野県 37 歳）

大きくなあれ大きくなあれ天爪粉

【評】赤ちゃんに汗疹どめの天爪粉を打ちながら「大きくなあれ大きくなあれ」の魔法をかける。慈しみの思いだ。

● 藤田ゆきまち ●（三重県 46 歳）

叱られた母の似顔絵ところてん

【評】母の似顔絵を描いても褒められるとは限らない。どんなに似せて描いても、必ずしも苦労は報われない。母はもっと美しいはずなのだ。「ところてん」の取り合わせが効いている。

● 小川いなせ ●（神奈川県 19 歳）

しぬ七日前に会いたいと思ってる  
おそーしきには来なくていいから

【評】ちゃんと意思疎通ができるときに逢っておきたいということだろう。それ以外は何も望まない。

● 小川いなせ ●（神奈川県 19 歳）

ランドセル

好きな色買えなかったし

名字くらいは選びたいけど？

【評】婚姻時の名字の選択を言っているのだろう。比較は好きな色を選べなかったランドセルである面白さ。幼な心に入学を喜びきれなかったのだろう。入籍では同じ思いはしたくない。案外似た環境かもしれない。

● 永山逢海 ●（神奈川県 19 歳）

机の傷をなぞる

忘れられていくあの子

ゆっくり消えていく

ナスカの地上絵

【評】机に傷を付けるのではない。付けられている傷をなぞるのである。自己主張をしない大人しい子が浮かぶ。誰かの印象

に強く残ることもないだろう。しかし、それは時間軸の取り方次第では、ナスカの地上絵とて同じなのかもしれないのだ。

● 屋敷旺甫 ●（京都府 51 歳）

伽羅路にひとりぼっちの幽霊と

【評】「伽羅路」と「幽霊」。どうしたらこんな組み合わせが発想できるのか。寂しさを増幅させる装置になっている。

● ちはる ●（石川県 19 歳）

母からの電話に浮いている海月

【評】たまたま母の電話を受けたときの視界に海月がいたのかもしれない。しかし、母との関係の絶妙な表現に見えてくる。